Tulips University of Tsukuba Repository

トマス・アクィナスのアナロギア論に関する諸問題の分析

著者	内山 真莉子
雑誌名	筑波哲学
号	23
ページ	140-155
発行年	2015-03-31
その他のタイトル	An Analysis of Some Problems in Thomas Aquinas' Theory of Analogy
URL	http://hdl.handle.net/2241/00128926

【研究ノート】

トマス・アクィナスのアナロギア論に関する諸問題の分析

内山　真莉子

1.

トマスにとってアナロギアとは、我々が神を有意味に語るために必要不可欠な術の一つであり、より積極的な言い方をするならば、神と我々とを繋ぎうる唯一とも言える方法である。しかしながら、そうした意義深さとは裏腹に、トマスにおけるアナロギア論は未だに明確な解決がなされていない、いくつかの問題を含んでいる。そのために研究者間でかねてより多くの議論を呼んできたトピックの一つとなっている。アナロギアのそもそもの定義が同名同義でもない、同名異義でもない、その中間という曖昧なものである上に、トマスがそれをテーマとした著作を残さなかったために、数々の著作の中からアナロギアに関する断片的な記述を集積し[1]解釈を試みることが必要であるということが、理解の一本化を妨げる要因の一つだと考えられる。

長くトマスのアナロギア論に対する注解としての権威を保持していたのはカイェタヌスによる『名辞の類比について』であるが、しかし彼が為したアナロギアの分類には多分に恣意性が含まれており[2]、現在では無批判にカイェタヌスの主張を取り入れる研究者は皆無である。カイェタヌス以後もフェラーラのシルウェステル、スアレスなどによる整理が試みられ[3]、今日に至るまで種々の整理分類が提示されてきてはいるが、定説はなく、トマスのアナロギア思想の発展性や、更には体系的整合性はな

---

[1] トマスの著作の中で神と被造物に関するアナロギアについて記述されている代表的な箇所は以下の通り。『命題集注解』第 1 巻第 19 区分第 5 問第 2 項第 1 異論解答 ;『真理論』第 2 問第 11 項主文 ;『能力論』第 7 問第 7 項主文 ;『対異教徒大全』第 1 巻第 34 章 ;『神学大全』第 1 部第 13 問 ;『神学綱要』第 1 巻第 27 章。

[2] カイェタヌスは『命題集注解』第 1 巻第 19 区分第 5 問第 2 項第 1 異論解答における三つのアナロギアの分類のうち、三つ目の「概念においても存在においても異なっている」という分類を、『真理論』第 2 問第 11 項主文において述べられている「比例性の類似」に基づく分類と同一のものと見なした上で、トマスにおける神と被造物とに見出されるアナロギアは全てこの「比例性のアナロギア」によるものだ、と主張した。しかしその両者を同一のものとするテキスト的根拠は乏しく、「比例性」という概念を詳らかにしないまま、『真理論』以降のテキストにもあえて「比例性」という言葉を補って引用している。Caietanus, *De nominum analogia*, cap.1,4-7 ; cap.2,20-21 ; cap.3,27-30 ; cap.7,82, ed. P. N. Zammit. & P. H. Hering. Rome: Angelicum. 1952.

[3] Klubertanz, G. P. *St. Thomas Aquinas on Analogy. A Textual Analysis and Systematic Synthesis*. Chicago: Loyola University Press. 1960. pp.5-19.

いということまでもが唱えられてきている[4]。

しかしアナロギアとは、上述の通り同名同義と同名異義の中間という定義でもって、神と被造物である我々を何らか類似したものとして繋ぎとめるものである。それは言わば、トマスにとっては神と被造物がどのように類似していて、どのように類似していないか、その距離感を示すものでもあり、思想の根底にも据えられうるものである。アナロギアをそのように理解すると、それが理論的に発展している、ないし体系的整合性はないと主張することは、トマスが神に対しどのような態度で思索していたのかが初期から後期にかけて変化している、ないし一貫したものではないと述べることと同じ意味をもつことにもなる。このことに関してはまた大いに検討の余地があるだろうが、それ以前に、トマスが神に対しどのような立ち位置で考察を加えたかという基本的な態度は、終始一貫したものであったはずだと考えることはできないだろうか。つまり現代におけるトマスのアナロギア論に対する解釈は、発展性があるという立場と体系的整合性がないという立場の二つが主流となりつつあるが、第三の道として、体系的整合性を有する一貫した理論であると主張する可能性は、未だ探究しうるものなのではないか。それゆえ、仮にトマスのアナロギア論に対するそうした第三の道を主張するならば、どういった解釈上の問題点があるのかが先ず始めに理解されるべきであろう。よって本研究ノートでは、今までに著されてきた多くの先行研究の中から特に影響力があると判断されるいくつかのものを実際に取り挙げ[5]、それぞれの主張をまとめることで、問題点を整理する。そうした問題点を把握することで、今後の研

---

[4] 本研究ノートで取り扱う限りで以下に先行研究を列挙する。発展性を主張している主な論客は Klubertanz（1960）と Montagnes, B. *La doctrine de l'analogie de l'être d'après Saint Thomas D'Aquin*. Louvain: Publications Universitaires. 1963、およびそれに大部分で同意している芝元航平「トマス・アクィナスにおけるアナロギア理解の発展について」『中世思想研究』第 47 号. 37-47. 2005 であり、体系的整合性がないことを主張しているのは McCabe, H. "Appendix 4, Analogy." St Thomas Aquinas. *Summa Theologiae*. vol.3. London: Blackfriars. pp.106-107. 1964 と、彼に賛同している稲垣良典『トマス・アクィナス「存在」の形而上学』春秋社. 2013 である。また、ある種の理論的体系性を主張するものとして McInerny, R. M. *The Logic of Analogy. An Interpretation of St Thomas*. Hague: Martinus Nijhoff. 1971 および *Aquinas and analogy*. The Catholic University of America Press. 1996 を扱う。最後に、先のカイェタヌスが述べた、比例性のアナロギアこそが神と被造物とにあてはまる真のアナロギアである、という主張（主にはそれに同調するトミストたち）に反論する Lyttkens, H. *The Analogy between God and the World: An Investigation of Its Background and Interpretation of Its Use by Thomas of Aquino*. Uppsala: Almqvist and Wiksells. 1952 の説を取り挙げる。

[5] Courtine, J.F. *Inventio analogiae. Métaphysique et ontothéologie*. Paris: Librairie Philosophique J. Vrin. 2005 や、井澤清「トマス・アクィナスにおけるアナロギア論とカエタヌス」『中世思想研究』第 40 号. 37-54. 1997、稲垣良典『神学的言語の研究』創文社. 2000、芝元（2005）が実際に引用しているように、脚注 4 で列挙した先行研究はいずれもトマスのアナロギア理解において教科書的な役割を果たしている文献である。

究への橋渡しとしたい[6]。

2.

先ずは体系的整合性はないことを主張する先行研究を取り挙げる。トマスのアナロギアはその場その場で説明の仕方が異なっており、整合性は見られず、むしろその重要性の低さを理解すべきであり、理論としての整合性はないと主張する立場をとるのがマッケイブである[7]。彼に賛同する形で、稲垣は以下のように述べる。

> 私はマッケイブのトマス類比論についての見解は、これまで私が知りえた中で最も事柄の核心をついたもののように思われる（中略）つまり、カイエタヌスの類比理論の中核とも言える、類比的な言語用法の三つの種類の区別は、トマス自身にとっては何ら重要な意味を持つものではなかった、と言うことである。[8]

稲垣自身は、ここからさらにトマス本来のアナロギア理論における強調点を明らかにする方向へ論を進めるのであるが、さしあたり上述の引用箇所から理解されるのは、トマスにおけるアナロギアに関する記述には整合性がないことを認める立場であるマッケイブに全面的に賛同している、ということである。

ではマッケイブ自身はどのように述べているのか確認しよう。

> トマスにとってアナロギアは、神について知るようになるための方法ではなく、宇宙の構造に関する理論でもなく、ある言葉の我々の使用法に関する意見なのである。（中略）我々の見解としては、このことはトマスが、彼の為した区分について特別な重要性があるとは考えていなかったことを示唆している。[9]（傍点筆者）

ここで強調点を置いた「このこと」とは、『神学大全』第 1 部第 13 問第 5 項主文に見

---

[6] 同じくトマスのアナロギアに対する歴史的な見解や、有力な見解をまとめ、体系的な理解を示しているものとしては Long, S. A. *analogia entis*. Indiana: University of Notre Dame Press. 2011. を参照。そこではクルーバータンツ、モンターニュ、マキナニーの見解が批判検討されている。

[7] ブライアン・デイヴィスは Davies, B. *The Oxford Handbook of Aquinas*. Oxford: Oxford University Press. 2012 にて McCabe（1964）を引用し、トマスのアナロギア理解に関してその内容は核心をついていると述べている（pp.396-397）。

[8] 稲垣（2013）pp.132-134.

[9] McCabe（1964）p.106.

られる（とマッケイブが考えている）矛盾を指す。マッケイブはその箇所におけるアナロギアの説明には整合性が欠けており、それはトマスによる緻密な検討がアナロギアにはなされていないことを示唆するものだと主張している。以下、その問題となるテキストを引用する。

> それゆえこのような諸々の名は、神と被造物とについてアナロギアに従って、すなわち比に従って言われると述べなければならない。このことは名において二通りの仕方で生じる。①一つには、多くのものが一つのものへの比を有するようにしてであり、ちょうど「健康」が薬と尿について、各々が動物の健康性に対する秩序、ないし比――尿は徴、薬は原因である――を有する限りで言われるようにである。②もう一つには、一方が他方への比を有するようにしてであり、ちょうど「健康」が薬と動物について、薬が動物においてある健康性の原因である限りで言われるようにである。そしてこの後者の仕方によって、あるものは神と被造物とについてアナロギア的に言われるのであって、純粋な同名異義的にではなく、同名同義的にでもない。（中略）
>
> そしてこの共通性のあり方は、純粋な同名異義と単純な同名同義の中間にある。何故なら、アナロギア的に言われる事柄においては、同名同義におけるような一つの概念がある訳でもなく、同名異義におけるような完全に異なった概念がある訳でもない。むしろ③このように複数のものに言われる名は、ある一つのものに対する異なった比を意味表示しているのである。例えば、尿について言われた「健康」は、動物の健康性の徴を意味表示し、一方で薬について言われた「健康」は、同じ動物の健康性の原因を意味表示するようにである。[10]（傍線筆者）

そしてマッケイブはこの箇所に関して、次のように解釈している。

> 第 13 問第 5 項は読者に対し、とてもよく知られた困難をもたらす。すなわち、トマスが最初に二種類のアナロギア的用法を区別したとき――「健康」が食事と顔色、また食事と人間に関して用いられるという仕方でそれぞれ説明される――、彼は言葉が神と被造物に関して用いられるのは後者の仕方においてであると述べているように思われる。そしてその後、項の最後には、彼は第一の仕方に戻っ

[10] Thomas Aquinas, *Summa Theologiae*（ST）, I, q.13, a.5, co. ed. Leonina. t.4. Rome. 1888.

ているようである。[11]

この点について、マッケイブの言わんとすることをまとめると以下のようになる。先ずトマスはアナロギアを二種類に分類し（引用箇所傍線部①多くのものが一つのものに対する比を有する、②一方が他方に対して比を有する）、神と被造物とに当てはまるのは明確に二つ目の方の分類だとしていることを確認する。しかしながら、続く段落でトマスは、（傍線部③）複数のものに言われるアナロギア的な名は一つのものに対する異なった諸々の比を意味表示すると述べていて、一対多関係、すなわち①のアナロギアの説明に戻ってしまっている。ここで明らかに説明に関する不整合が見られ、このことはトマスが、彼の為した区分について特別な重要性があるとは考えていなかったことを示していると主張するのである。一見するに矛盾している上記引用箇所をどのように解釈するかは、大きな問題点の一つである。

3.

次にアナロギア論の発展性を主張する立場を見てみる。主な論者として、クルーバータンツとモンターニュ、そして芝元を挙げ、その内容を検討する。

3-1.

今ここで三名の名を挙げたが、内容を見る限り、それぞれがトマスのアナロギア論に発展性が見られると主張する根本的な点は共通している。それはすなわち、『真理論』第 2 問第 11 項がトマスのアナロギア論における一つの特異点であり、それ以降の著作（『能力論』以降）ではその内容から転換し、『真理論』以降で考えるならば、一つの整合的な体系が提示されるようになったとする点である。このことをクルーバータンツは以下のように述べる。

> 1256 年あたりの数ヶ月間、聖トマスは固有な比例性をいわゆる内的なアナロギアとして、神と被造物との間にある存在論的な類似を説明するものだと考えていた、もしくは考えようとしていた。この立場は、彼がそれ以前には有していなかったし、その後の著作において決して再び発展させようと思わなかったものである。

[11] McCabe（1964）p.106.

> それゆえ固有な比例性とは、彼の経歴の中で初期のある期間にトマスによって示されていた教えという意味で、あるトマス的アナロギアである。[12]

これは、『真理論』以降の著作において用いられている「比例性」という言葉が、『真理論』で言われていたような神と被造物との間において見られる、共通の完全性に基づく内的な類似性を表すもの（このことをクルーバータンツは「固有の比例性」と述べる）ではなくなっている、ということを根拠として主張されている。

「比例性」という言葉の含意するところのものが、『真理論』とそれ以降の著作では異なっている、その実例としてクルーバータンツが挙げているテキストは『分析論後書注解』、『形而上学注解』、『倫理学注解』、『能力論』、『神学大全』など多岐にわたる。そこにおいて見られる「比例性」をクルーバータンツは「アリストテレス的比例性」と称するのであるが、それらは単に何らかの機能、または関係が類似していることを説明しているのみであって、共通の完全性に基づく内的な関係を説明しているのではないと解釈する。例えば『形而上学注解』にて、見る力が見る能力に関係するように、聞く力は聞く能力に関係すると述べられている箇所について、以下のように述べる。

> 同様にしてこれらの比例性も、少なくとも直接的には、何ら存在論的な類比を表現していないように思われる。働き、ないし対象と一致する二つの作用的な力の比較は、共通的な完全性を説明してはいない（少なくとも明確に共通な一つの完全といったものはない）。それは、通常ならば同義的であり、ただ稀にアナロギア的であるような関係を述べているのであって、ある同義的に共通な完全性を暗に示しているように思われる。[13]

しかしながら、「比例性」という語の二義性を認めつつも、その内の一つは『真理論』での用いられ方であり、他方がその他での用いられ方である、と単純に二分することができるかどうかについては、検討が十分であるとは言いえない。それは各テキストの文脈をより詳細に確認した上で、判断されなければならないだろう。

3-2.

[12] Klubertanz（1960）p.94.
[13] ibid. p.84.

モンターニュもクルーバータンツと同様に、『真理論』におけるトマスのアナロギアは「暫定的な解答」[14]であるとする。その上で、『真理論』以降でトマスが神と被造物とに当てはまるアナロギアとして主張しているのは一貫して一対一関係に基づくものであり、『真理論』にて見られるような四項関係ではないことを根拠とし[15]、「比例性」の思想はアナロギアの場面から破棄されたと述べている。何故破棄されなければならなかったのかというと、「比例性」に基づいてしまっては一対一のような直接的な関係が否定されるがゆえに、神と被造物との間に裂け目を生じさせてしまい、それは神を不可知なものとする危険が伴うからである。それゆえ『真理論』以降では形式的な原因関係に留まらず、作出的な原因関係[16]を神と被造物との間に措定することによって、神の超越性を損なうことなく、本質的な仕方で神について知ることが可能になっていると主張する。以下にモンターニュの記述を引用する。

> それでは何故トマスは『真理論』での解答を破棄したのか。恐らくは、その解答が提示する気まずさのゆえである。というのも、その解答は、神を不可知にしてしまうのを承知の上で、存在するものと神との間に裂け目を生じさせてしまうからである。（中略）形式的な原因性とは異なり、作出的な原因性は存在するものと神との間にある関係を打ち立て、それによって神は、超越していることを損なうこと無く、最も本質的な仕方で全てのものへと現前する。形而上学的な観点の変化、すなわち原因性と存在に関するある考えは、トマス自身が最終的に関わるところの解決を意のままに提示する。存在するものと神との間には、ある「一対他方」のアナロギアが存するのである。[17]

モンターニュはこのようにして、『真理論』以降で主に述べられる「一対他方」の関係こそが、神と被造物との間のアナロギアとしてトマスが最終的に保持するものであり、それは『真理論』における「比例性」とは相容れないものであると主張するのである。しかし、そもそも神と被造物との間にある関係とは、「作出的な」原因関係であ

---

[14] Montagnes（1963）p.67.

[15] 一対一とは、1：2 という関係であり、四項関係とは 3：6 = 4：8 という関係である。確かに『真理論』以降、すなわち『能力論』、『対異教徒大全』、『神学大全』ではこうした四項関係は明示的には登場しない。

[16] 形式的な原因関係とは、我々の認識の中でのみ捉えられる因果関係のこと（例えば「類似している」など）であり、それに対し作出的な原因関係とは、神が被造物を創造したという実在的なレベルでの因果関係に基づくものである。Cf. Montagnes（1963）pp.91-92.

[17] Montagnes（1963）p.93.

るのかどうかは先ず以て検討の余地があるだろう。というのも神からの存在の分有とは、そのまま実在的な作出関係を意味するのか、または範型的な類似関係を意味するものであるのかは、モンターニュの主張の正当性を検討する際に重要な点となるからである。その検討を経た上で、モンターニュがトマスによる最終的な解答だとする「一対他方」の関係と、『真理論』における「比例性」とは、果たして互いに排反な事柄であるのかどうかを、我々は考察しなければならない。

3-3.

芝元は大枠でモンターニュの意見に則っているが、『真理論』以降で明確になった神と被造物との作出的な原因関係が、『対異教徒大全』第 1 巻第 29-34 章、『神学大全』第 1 部第 13 問、『能力論』第 7 問でそれぞれ更なる発展を見せていると述べる。以下にその主張内容を簡潔にまとめる。初期では、被造物とは比例的に隔たった神の完全性がどのようにして我々に知られうるかは説明されていないが、『対異教徒大全』において、神は作出因として自らに似たものを現実に作り出すので、我々はその類似に基づき、不完全ではあるが完全性の類似したものとして、神を原因性としてのみでなく、本性それ自体を認識しうることが述べられるようになった。『神学大全』に至っては、命名は概念の秩序にのみ従うのではなく存在の秩序にも従うことが確認されるようになる。それは、存在のレベルでは明らかに被造物より神は先立っているので、神名は被造の名[18]ではあるが内容としては神により先に言われるという説明に基づいている。最終的に『能力論』にて、我々は作出因として関係的に神を認識するが故に神の卓越性を認識するのではなく、神における完全性の卓越性それ自体を、すなわち本性の一部を認識することによって、作出因であるという関係をも認識しているのであって、神を原因として認識することが神認識の根拠となっているのではないことが確認されるまでに至る。原因としての認識だけでは、常に原因となるものが結果よりも後に認識されるのであるが、神認識においてそれは否定される。すなわち概念のレベルにおいても神は被造物に先立つようにトマスの主張は発展している、と芝元は主張するのである。それはどういった認識論的根拠に基づいて、我々は神を認識しうるのかという、神認識の成立根拠に対する理解の発展とも言いうるものだとされている[19]。

以上の芝元の主張の要点は、我々が神の認識する際、原因性としてのみではなく、

[18] 我々被造物の言葉によって表された名、という意味。
[19] 芝元（2005）pp.44-49.

神の本性それ自体を認識することができる、というように記述が発展していっている、ということだ。しかしながら、我々被造物が現世的な知性において神の本性それ自体を認識することを、トマスが何らの条件をつけずに認めているかどうかは疑問に付すことが出来る。何故なら、トマスは『対異教徒大全』第 1 巻 31 章（ここは芝元も実際に引用している）にて、以下のようにも述べているからだ。

> 以上のことから、複数の名を神に与えることの必然性は明らかである。というのも我々は神を、結果から神へと到達することによらなければ本性的には認識しえないのだから、それによって神の完全性を我々が意味表示するところの名は、多様にあるのでなければならない。ちょうど諸事物においても、多様な完全性が見出されるように。ところでもし我々が、あるがままの神の本質それ自体を認識したり、神に固有な名を当てはめることができるとするならば、我々はただ一つの名によって神を表現することになるだろう。そしてこのことは、本質を通じて神を見るであろう人々に約束されているのである。[20]（傍線筆者）

この箇所からは、トマスが神の本性認識を端的には認めていないように思われる。こうした記述を基に、芝元の主張が果たして正しいものであるのかどうか検討されなければならないだろう。

以上がトマスにおけるアナロギアは『真理論』以降発展していることを主張する主な論点であるが、それらをまとめると以下の四点となる。一つ目は、神と被造物との間の内的な関係を含意するような「比例性」が『真理論』以降では用いられていないこと（クルーバータンツ）。二つ目は、『真理論』以降では「比例性」という四項関係ではなく、一対一関係が神と被造物とに当てはまるものだと述べられていること（クルーバータンツ、モンターニュ）。三つ目は、『真理論』ではそれ以降の著作とは異なり、作出的な因果関係に言及されておらず、類似や模倣など、形式的（概念的）な因果関係に終始していること（モンターニュ）。四つ目は、神は被造物の単なる原因としてのみ認識されるのではなく、神の卓越した完全性それ自体が認識されるということが、『真理論』以降に至って初めて確認できること（芝元）、である。これらの論点が妥当なものであるならば、トマスにおいてアナロギア論は『真理論』以降で発展を見せていると述べることの正当性は保たれると思われる。

---

[20] Thomas, *Summa Contra Gentiles*, I, cap.31. ed. Leonina. t.13. Rome. 1918.

4.

続いて、トマスのアナロギア論の整合性を主張する立場についても確認する。マキナニーは、トマスのアナロギア論が重要であるならば、それは整合的な理論でなければならないとした上で、アナロギアそれ自体は「名のアナロギア」としてのみ扱われており、それは形而上学的な理論ではなく、ごく論理学的な理論である、ということを主張する[21]。

だからといって、彼は存在論的な基盤がトマスのアナロギアには一切ない、と述べている訳ではない。実際彼はアナロギアの存在論的基盤についても論じており[22]、意味論の前提として、対象の存在があり、それを我々が認識し概念を形成し、その概念に基づき名付けを行うという過程は当然のこととして受け入れていると考えられる。さらに、先に紹介したような『真理論』における「比例性」に特殊性を見出しその前後の著作での発展性を唱える立場とは異なり、『真理論』以降で言われている「比」は「広義の比」であり[23]、そこには「比例性」も含まれうると解釈する。そのような解釈によれば、確かに「比例性」に基づく著作間の不整合は解決されうるし、トマスのテキスト解釈としても納得のいくものと思われる。

しかしマキナニーのような、アナロギアをただ「名のアナロギア」としてのみ扱う、すなわちそれがアナロギアの第一義的な意味であり、存在論的な文脈で用いられるアナロギアは本来的な用法ではないとする立場それ自体が、真にトマスのアナロギア理解として正当的なものであるかは大いに疑問に付される。

一つの疑問点は以下の通りである。マキナニーがトマスのアナロギアを「名のアナロギア」としてのみ取り扱うことの理由は、トマスがアナロギアという語でもって存在論的な因果関係について説明するとき、それは「アナロギア」という語それ自体をアナロギア的に用いている場合であり、「アナロギア」ということを説明する際にはその意味では用いていないから、というものである[24]。このことを主張する根拠を、マキナニーは『ボエティウス三位一体論注解』第 5 問第 4 項主文においてなされている、神的な学についての論考から得ている。そこでは神的な学が二通りにあることが確認

[21] McInerny（1971）p.73.
[22] ibid. pp.97-98.
[23] ibid. p.86.
[24] McInerny（1996）pp.137-142.

されるが、更にそうした神的な学に関わる、あらゆる有に共通的な原理が共通的である仕方を二通りに分類する。以下に該当箇所を引用する。

> 実際、この諸原理は、彼の（著作）『治癒の書』におけるアヴィケンナ（の言葉）に従って、二通りの仕方で共通的であると言われうる。一つには、述定によってである。例えば私が「形相はあらゆる形相にとって共通的である」と述べるようにであるが、それは形相はあらゆる形相について述語付けられるからである。もう一つには、原因性によってである。例えば我々が、数的に一つの太陽が、あらゆる生成可能なものどもにとっての原理であると言うようにである。ところで、あらゆる有の共通の原理は一つ目の仕方によってのみあるのではなく――これについて、哲学者は『形而上学』第十巻において、あらゆる有はアナロギアに従って同じ原理を持つと述べている――、二つ目の仕方によってもある。[25]（傍線筆者）

この箇所では確かに、述定によって共通的であると言われる原理に関して、「アナロギアに従って同じ原理を持つ」ということが言われている。これを受けてマキナニーは以下のように述べる。

> 『ボエティウス三位一体論注解』のこのテキストをもとに、私はあえて以下のことを提案しようと思う。トマスは「アナロギア」という言葉を、存在の実在的な階層を述べるためには用いておらず、「存在のアナロギア」によって意味されているのは、神からの被造物の秩序だった継起なのである、と。[26]（傍線筆者）

しかしこうしたアナロギアから実在性を排する主張は、根拠が薄いとも言いうる。というのも、上記『ボエティウス三位一体論注解』の引用箇所から、アナロギアは二つ目の仕方である原因性によって共通的と言われる原理（すなわち存在論的な原理）の方に全く関わらないとまで言いうるのか、という疑問を差し挟むことが出来るからである。

また、もう一つの疑問点としては、神と被造物におけるアナロギア的な名付けに関

[25] Thomas, *Super Boetium De Trinitate*, q.5, a.4. co. ed. Leonina. t.50. Rome-Paris. 1992.
[26] McInerny（1996）p.156.

する事柄である。アナロギア的な名付けにおいては、ある固有の概念を有する一つのものがより先に名付けられ、それに関係する限りで他のものも同じ名を受けとるということは確かにトマスのテキストにおいても度々述べられることである[27]。しかし特に神と被造物とにおけるその名付けに関して、存在論的な基盤に立ち入ることなく説明することは果たして可能なのであろうか。というのも、我々の認識の固有の認識対象は質料的被造物であり、我々はそこから最初に概念を得る[28]。その限りでは、より先に名付ける根拠となる固有の概念とは常に我々被造物において先に形成される。しかしながら、神名となる「善」や「知」などは、神についてより先に語られなければならない。ではそれは、いかにして可能であるのか。このことが説明できなければ、トマスにおけるアナロギア論は不完全なものとなってしまうだろう。そしてこのことに関して、マキナニーは以下のように述べる。

> 要するに、神と被造物にアナロギア的に共通な名においては、被造物がより先であり、その固有の概念なのである。何故なら、我々は、その意味を神に適用可能なものとしてあつらえるためには、被造の仕方でその意味に言及しなければならないからである。それと同時に、我々は、我々が最後に名付けるものが、<u>存在論的には最初であることに気付く</u>。[29]（傍線筆者）

すなわち「存在論的に神がより先である」と気付くことが、神においてある名がより先に語られることの根拠となるのである。このことがトマスにおけるアナロギアの説明に不可欠であり、アナロギアの概念自体に含意されているならば、それは単にマキナニーが主張するような「名のアナロギア」であると断じてよいものであろうか。

以上大きく二つの疑問点を提示したが、これらはトマスのテキストと照らし合わせながら、慎重に考察されるべきものであろう。

5.

最後に、トマスにおける「比例性のアナロギア」とは神について何らか内実のある事柄を述べるために必要な論理的な補助手段に過ぎないのであって、アナロギアの中

---

[27] Thomas, ST, I, q.13, a.4, co ; a.5, co ; a.6, co 参照。
[28] Thomas, ST, I, q.12, a.4, co.
[29] McInerny（1996）pp.160-161.

心的役割を果たしている訳ではないと述べるリトシェンスの立場を確認する[30]。

そもそも「比例性のアナロギア」とは、カイェタヌスがトマスのアナロギア論の注解をする際に導入した用語であり、それは直接的には『真理論』第 2 問第 11 項主文で述べられているアナロギアを指し示す。アナロギアとは一つの語を異なる二つ以上の対象に述語づける際に、ある意味では同じであるがある意味では異なるように用いる方法であるが、「ある意味では同じ」となるような語の一致がどのようになされるのかと言えば、比例性すなわち「比の類似」に基づきなされる。二つの比（例えば 3 : 6 と 4 : 8）は当然別個の比としてあるが、それぞれがある点（6 は 3 の、8 は 4 の「2 倍である」という点）で一致している。二つの比が直接的には関係していないが、ある点で間接的に一致していることを示すのが「比の類似」であり、このような間接的な一致が神と被造物とには正に当てはまるのであって、それゆえこの「比例性のアナロギア」こそがトマスのアナロギアにおいて中心的なものであるというのがカイェタヌスの主張であった。[31]

しかしリトシェンスは上述のような「比例性のアナロギア」の扱いに反意を表し、以下のように述べる。

> 例えば、比例性を重視するトミストたちは、「有」の概念は全てのものが必然的、偶然的、等の存在を有しているということを、複雑な仕方で考察することなしには考えられることができないと述べる。もしこれが支持されるならば、アナロギアの原型——数学的な比例性である——が、彼らをして、比の類似はアナロギア的な概念であるということにしたのだ、という事実を否定することが不可能になる。数学的比例性における「2 倍」の概念のように、比の類似は曖昧な仕方で成り立ち、全ての表された比について言われることができる。しかしながら我々は先に、一つの概念の下で、神と被造物との完全に形式的な比の類似を表現することは不可能であることを確認していた。我々は同様に、トミストたちはむしろ、アナロギア的な概念に、比例性的な四つの言葉のうちの二つを含ませるようにしなければならなかったということも確認していた。こうした観点から、アナロギア的概念の一性は比例的であると述べることは不可能であり、誤りであることに

[30] クルーバータンツは Klubertanz（1960）pp.13-17 にてリトシェンスの主張内容の検討を行っており、彼自身も『真理論』における「比例性」をトマスのアナロギア全体の中心概念とすることに対しては批判的であることは先に確認した通りである。
[31] 脚注の 2 を参照。

なる。というのも、それは固有の意味における比の類似を述べてはおらず、むしろ単に、ある関係または、ある比例的に理解された特質の存在を述べるのみだからである。[32]

このリトシェンスの主張を解釈しまとめると以下のようになるだろう。比が類似しているとされる二つの比において、例えば 3 : 6＝4 : 8 という類似した（それゆえに等号で繋がれた）二つの比において、「2 倍」という一つの概念が共通のものとして理解される。しかしながら、同じく「比例性」に基づき関係しているとされる神と被造物にも同様のことが当てはまるとするならば、神と被造物に共通する一つの概念を認めることになる。ところが、神は被造物とは一線を画す卓越した存在者であり、両者の間に共有される一つの概念などありえないはずである。それゆえ、特に神と被造物とについて述べる限りでは、「比例性」は本来的な意味では用いられてはおらず、何らかの比例的に共通する概念を述べている訳ではない、ということになる。むしろそれは単に、「類似した関係、ないしは性質が両者には在る」ということを述べるに留まるのである。よって、リトシェンスは「比例性のアナロギア」を神と被造物とに当てはまる中核的なアナロギアと見なすことに疑問を呈す。

そして「類似した関係、ないしは性質が両者には在る」ということを述べるということが、リトシェンスの解釈する「比例性」の役割となる。リトシェンスは「比例性」を「創造からとられたある種の内実を神について述べる際に、論理的な補助手段として用いる」[33]ものだと主張する。実際トマスが『真理論』第 2 問第 11 項第 2 異論解答でも述べているように、類似が述べられるのは同じ類の中におけるものか、異なる類に属するものの二つの場合であり、「比例性」は異なる類にも当てはまりうる類似である。神はそもそも類に属するものではないが、類に属していないという限りで人間という類に属するものとは異なる。つまりはこれは類を超越した語の使用方法を示すものであり、そうした限りでは「論理的な補助手段」だと言うことはできる。

また、神と被造物とにおいて述べられる語は単に類を超越しているだけでなく、意味内容の順序も通常とは異なるものでなければならない。というのも、何であれ言葉は、我々の知性が認識した内容からとられる。その限りでは、言葉というものはすべて被造の認識内容に基づいた被造の言葉である。しかし神の実体を指し示すことの出

[32] Lyttkens（1952）p.466.
[33] ibid. p.475.

来る語（例えば善、真、有など）は、神に述語づけられる際に被造の内容を表現している訳ではない。すなわち神名に関する限りでは、語の表示の仕方と、それが意味表示する内容が、前者は被造のものであり、後者は神を第一義とするといったように異なっているのでなければならない。こうした表示の仕方と表示内容のずれを生じさせる役割も担っているのが「比例性」であるとリトシェンスは述べる。例えば我々が「類」について述べる際、その内容には不確定に「種」についての事柄も含まれているし、その逆も然りである。これと同じようにして、我々があるものが「在る」と言うとき、そこには不確定にあるものの「本質理解」が伴っている。例えば「存在」に関して言えば、我々は確かに「在る」ものであるがそれは神からの創造によって「在る」ものとなっているのだという理解も随伴することになる。その随伴した理解に基づき、原因としての神に第一義的に「在る」が言われることを我々は承知するのである。このようにある語に不確定に含まれる内容があり、それを取り出す仕組み、ないし手段として導入されているのが「比例性」であり、それは語の使用に関する論理的な手段の一つであるとリトシェンスは述べている。そして以下のように結論する。

> トマスが一つの論理学的な問題としてのアナロギアに関して述べることの全ては、直接的なアナロギアのいくつかの型について言及しているのである。それゆえ、アナロギアに関するそうした主張を、トミストたちがするように、比例性のアナロギアにおける概念の一性を証明するために用いることは誤っている。ここで述べられたことは、原則としてトマスに対しても適用されなければならない。トマスが神と被造物における、比例的な仕方である何らかの特質について述べるとき、それは a）それは実際に存在するが、両者において異なった仕方である、ということと、b）それは異なった仕方で理解される、ということを含意している。[34]

問題は「比例性」をこのように理解するのが果たして正しいのか、ということである。確かにトマスは「比例性」ないし「比の類似」を述べる際に、数学的な例や類種概念を持ち出す。そのことからしてトマスが「比例性」を論理的な補助手段として扱っていたとすることにも確かに一理あると思われるが[35]、一方で、語の使用に関する事

[34] ibid. pp.469-471.

[35] 実際、Hochschild, J.P. “Did Aquinas Answer Cajetan's Question? Aquinas's Semantic Rules for Analogy and the Interpretation of *De Nominum Analogia*.” *Proceedings of the American Catholic*

柄ではない箇所で「比例性」が導入されている場面もある[36]。それゆえ「比例性」をリトシェンスのように扱ってよいものかは、トマスの他の著作の箇所とも比較検討された上で考察されるべきであろう。

（うちやま・まりこ　慶應義塾大学大学院文学研究科在学）

Philosophical Association. 77. 273-288. 2003 など、リトシェンスのこうした比例性の扱いに同意する立場は現代においても見られ、未だ検討の価値のあるものであろう。

[36] Thomas, Sent, III, d.1, q.1, a.1, ad 3 ; ST, I-II, q.3, a.5, ad 1 参照。